

保 育

5歳児が伝え合う喜びを味わうための環境・援助のあり方

— 3・4歳児との異年齢交流を通して —

中山 芙 充 子

1 研究の目的

幼児を取り巻く環境は、急激な社会の変化に伴い大きく変化してきた。少子化、核家族化が進行し、異年齢の子ども同士が集団で遊びに熱中し、時には葛藤しながら、互いに影響し合って活動する機会が減少するなど、様々な体験の機会が失われている¹⁾。そのため、自分の考えや思いを言葉で表現できず、気持ちを伝え合うことが苦手な子どもが多くなっている現状がある。

それに伴って、平成20年改訂の幼稚園教育要領の領域「言葉」のねらいには、「人の言葉や話などをよく聞き、自分の経験したことや考えたことなどを話し伝え合う喜びを味わう」²⁾と記され、「伝え合う喜びを味わう」ことは重要視されている。また、「特に近年、家庭や地域において幼児が兄弟姉妹や近隣の幼児とかかわる機会が減少していることを踏まえると、幼稚園において、同年齢や異年齢の幼児同士がかかわり、気持ちを伝え合い、協力して活動に取り組むなどの多様な体験をすることの意義は大きい」³⁾と記され、幼稚園での「多様なかかわりの中での伝え合い」が重要視されている。

さらに神長(2010)は、思いを伝え合い、よさを受け入れ合う協同性の育ちを支えるためには、「人とつながる多様なかかわりを学ぶこと」が必要であることをあげ、特に「異年齢の幼児とかかわる体験は、同年齢の幼児同士との協同の質を高めていくことにつながる」と述べている⁴⁾。また、林(2010)は、「さまざまな年齢の子どもたちとかかわり、そのなかで相手を理解し、ふさわしいかかわり方を身に付けた子どもたちは、同年齢の子ど

もたちとのかかわりにおいてもその力を発揮する」と述べている⁵⁾。つまり、協同的活動が増えていく5歳児にとっては、異年齢である3・4歳児とのかかわりを通して、思いを伝えたり、相手の思いを受け入れたりする経験をすれば、そこで身に付けた伝え合う力やかかわる力を5歳児同士のかかわりの中でも発揮することができるのではないかと考えた。そして、それらの力を発揮する中で、5歳児同士の伝え合いが充実し、思いが伝わる喜びや新しいアイデアを生み出す楽しさ、認められる喜びなどの伝え合う喜びを味わうことができるのではないかと考えた。

そこで、本研究では、3・4歳児との異年齢交流で育まれた伝え合う力やかかわる力を5歳児同士の活動の中で発揮し、「5歳児が伝え合う喜び」を味わうための環境・援助を明らかにすることを目的とする。

2 伝え合う喜びとは

本研究では伝え合う喜びを次のようにとらえている。

“伝え合う喜び”とは、同年齢や異年齢の友だちと思いを伝え合ったり、相手の気持ちを受け入れたりする中で、認められる喜びや新しいアイデアを生み出す喜びを味わっていくこと

たとえば、以下のような姿が見られるときに、5歳児の子どもたちは伝え合う喜びを味わっているのではないかと考えた。

○子ども同士が生き生きと伝え合う姿

○相手に自分の思いが伝わってうれしいと感じて

いる姿

○思いや考え、イメージなどを伝え合いながら共通の目的を実現しようとしていくことのおもしろさを実感している姿

○異年齢で年下の子に頼りにされ教える喜びを感じている姿

○クラス全体の場で、自分の思いや友だちの良さなどを伝え合い、認められる喜びを感じている姿

このように“伝え合う喜び”を味わうことを通して、認められたり受け入れられたりする経験を積み重ね、自分の思いに自信をもっていくようになると考えている。

3 幼稚園の異年齢交流とは

本研究では、幼稚園での3・4・5歳児の異年齢交流について以下の3点を押さえて考えている。

○自然な交流

幼稚園の好きな遊びの時間では、それぞれがやりたい遊びをみつけて遊んでいる。同じ場で一緒に生活しているとそれぞれの遊びの流れがありながら、互いの遊びに興味をもち自然に出会いが生まれる。その出会いを異年齢交流の機会として生かしていく。

○意図的な交流

好きな遊びの時間に自然に発生してきた遊びや互いの興味関心を生かしながら、異年齢の教師が連携をとり、交流する場を設ける。

○かかわる力・伝え合う力の育ちの場

多様な人やものごとと出会い、思いを伝えたり受け入れたりして得た体験が、また新たにかかわってみよう伝えたいという気もちにつながるようにする。

4 研究の方法

(1) 対象児

年長組 5歳児23名（男児10名 女児13名）

(2) 対象児が交流を行う異年齢の幼児

年中組 4歳児21名（男児10名 女児11名）

年少組 3歳児26名（男児13名 女児13名）

(3) 観察期間・場面

平成24年6月から7月、10月から11月

好きな遊び・まとまった活動の時間における異年齢交流及び同年齢での活動の中で、担任教師が子ども同士の伝え合いの場面の事例を抜き出す。

(4) 方法

各事例の中で、5歳児が伝え合う喜びを実感するための環境・援助を、幼稚園教諭6名、養護教諭1名によるカンファレンスを行う。その中で、教師の環境・援助が適切であったかを検討するとともに、よりよい環境・援助を明らかにする。

5 実践事例

実践例1 「おばけ屋敷ごっこをしよう！」

<背景>

雨降りでいつもより薄暗く感じた子どもたちが、「おばけ屋敷みたい！」と言い、おばけを作り始めた。同年齢でおばけ屋敷ごっこを楽しむうちに、「小さい組さんをお客に呼びたい」という声があがり、3・4歳児を誘うようになってきた。ところが、客としてやってきた4歳児が「こんなおばけ屋敷、ぜんぜん怖くない！」と言って、残念そうに帰って行ってしまった。

①7月8日「もっと怖いおばけ屋敷にするために、クラスで話し合う」

4歳児が「こんなおばけ屋敷、ぜんぜん怖くない！」と残念がっていたことをクラスで集まった時に知らせると、「もっと怖いお化け屋敷を作ろうや」という声があがり、“どうすれば怖いお化け屋敷になるのか”という話し合いになっていった。「まだ、窓に新聞が貼れていないところがあって、明るいよ」「もっと暗くなるように、全部の窓に貼ろう！」「お化けが少ないから、もっと作った方がいいよ」「おっきい段ボールにお化けいっぱい絵を描いて壁

を作ったら?」「おばけを上からぶら下げたらいいよ」「机の下が暗くなるように、段ボールとかを周りにつけたらいいよ」「机ももっとつなげて長くしよう」という話になり、お化けを描いたり作ったりするグループ・窓に新聞紙を貼るグループ・トンネルを作るグループなどに分かれて、友だちと相談しながら作り、暗くて怖いおばけ屋敷になっていった。

【考察】

①では、異年齢をお客に呼ぶことで出てきた「こんなおばけ屋敷、ぜんぜん怖くない」という言葉をクラス全体になげかけることで、“もっと怖いお化け屋敷を作りたい”という共通の目的が生まれ、その目的に向けて自分なりに考えたことを伝え合っていた。そのことで、子どもたちの「どうしたら怖くなるのかな」「こうしたらどうだろう」という探究心を刺激し、お化け屋敷づくりのさらなる工夫へと駆り立てていった。このように5歳児では、遊びの後や降園前などに、その日楽しんだ遊びをクラスに広げたり、問題点を投げかけたりする伝え合いの場を設けることも大切である。そのことで、友だちが楽しんでいることに興味をもってやってみようとしたり、友だちが困っていることを一緒に考え、解決したりする経験をできると考える。そのような姿を見守り、認めていく中で、友だちと伝え合う喜びを少しずつ感じられるようになっていくと考えている。



図1 おばけやしきへようこそ!

②7月10日「小さい組さんが泣いているよ」

おばけ屋敷を楽しみにやってきた3歳児。実際におばけ屋敷の中に入ると、以前よりも暗くなり、とても怖く感じた様子。じわじわ〜と涙があふれて「こわい〜」と泣き出してしまふ。それに気づいた5歳児のA女とB女が「大丈夫?」と言って、3歳児に駆け寄る。泣き続ける3歳児の背中をさすりながら「何がこわいかな」とA女が聞くが、3歳児は泣いて答えることができない。教師と一緒に考えながら、状況に気づいていない周りの5歳児に「年少組さんが泣いてるみたい。どうしたのかな」と問いかけると、C女とD男とE男も状況に気づき、「どうしたの」と言いながらそばにやってきた。するとB女が「年少組さんが怖いんだって。でも何が怖いんか分からんのかな」と状況を説明する。「トンネルが怖いかな」「おばけの絵かな」と5歳児で相談していると、「もしかして、おばけの音が怖いんじゃない?」とC女が言い出し、「そうかもしれんね」と周りの子どもたちも賛成していく。そして、早速、テープを入れ替えて“おばけなんてないさ”をかけていった。しかし、まだ「こわい〜」と3歳児は、涙目になる。泣きやんでくれない様子を見て「おばけが出てこない歌がいいよ」と考えた5歳児。次にかけた曲は、運動会で4年生と一緒に踊った“カモメの水兵さん”。曲がかかると、4年生さんに教えてもらったように目線を合わせて「こうするんだよ」と言いながら踊りを教え始めた。すると、3歳児の涙はすっかり止まり、笑顔で5歳児たちと一緒に踊っていった。その様子を見て、5歳児たちも笑顔になっていった。

【考察】

②では、教師は3歳児の泣いている状況を解決する方法を話し合えるように、状況に気づいていない5歳児に、気づけるきっかけづくりをし、同年齢や異年齢とのかかわりをつないでいった。その中で5歳児が、3歳児のためにできることを友だちと話し合いながら試していくと、3歳児は泣

き止み、最後は笑顔になっていった。そのことは、「やっぱり、こう思っていたんだ」という自分なりの納得や「やってよかった」「ぼくたちわたしたちが助けてあげた」という満足感や自己肯定感をもつことになり、もっとやってみようとする意欲につながっていった。このことから教師は、遊びの様子を見守りながら、子ども自ら情況に気づいたり、自分なりにできることを考えたりしたことを、相手に伝えられるように友だちとのかかわりをつなぎ、子ども自身が起きた情況について友だちと考え合えるようにすることが大切であると考える。その中で、困っている友だちのことを知ったり、自分もできることを考えたりしながら、子ども同士が伝え合う姿へとつながっていくと考えている。



図2 もも組さん、どうしたの？



図3 もも組さんが泣き止んだよ！

実践例2

「あきのどんぐり村ランドをつくろう！」

<背景>

10月に、年間を通して交流している4年生と小学校で“秋祭り”をしたことをきっかけに、幼稚園でも段ボール迷路を再現して作る姿が見られた。その中で、「もっと大きい迷路を作りたい」「小

さい組さんも呼びたい」という声があがってきた。そして、4歳児からも「きく組さん（5歳児）と一緒にやってみたい」という声があがってきた。そこで、5歳児と4歳児のそれぞれの興味を大切にしながら、遊戯室で「秋のどんぐり村ランド」を作る交流が始まった。

①11月16日

「勇気を出して小さい組の思いを代弁する」

どんぐり車コーナーでは、5歳児がコースづくりをしている。そこへ4歳児がどんぐり車をもってやってきた。その様子に気づいたF男が、「ここがスタートだよ。ここから走らせて」と教えると、4歳児はうれしそうに車をスタートさせた。ところが、コースにたくさんトレイなどを貼りつけすぎて、車がひっかかり前に進まない。何度も挑戦していた4歳児は、「車が走らん」と悲しそうにF男に言った。一部始終を見守っていたF男も困った表情である。F男は「このトレイがあるから進まんのよね」と年中児に言い、悩んだ様子だった。

だが、しばらくするとG男のところへ行き、「すみれ組さん（4歳児）が困ってるから、G君が貼ったトレイ1つはがしてもいい？」と聞いた。G男が「いいよ」と言うとF男も笑顔で「ありがとう」と言って、4歳児のところへ走って帰ってきた。そして、4歳児に「車が走るように直してあげるね」と言って、障害になっていた大きなトレイを1つはがした。すると、見事に走るようになり、4歳児もF男もとても喜んでいた。

【考察】

①のG男は、いつもリーダーシップをとり、自分の思い通りに遊びをすすめようとする姿が見られていた。一方、F男は、G男の言いなりになって遊ぶ姿が多く見られていた。

しかし、どんぐり車が走らず困っていた4歳児のために、F男は勇気を出してG男のところへ行

き、4歳児の思いを代弁していった。いつもは、我慢してしまうF男であったが、4歳児の悲しそうな様子から、なんとかしてあげたいという気もちが思いを伝える原動力となったと考えられる。このように異年齢のかかわりでは、年下から頼られることで、同年齢に対しても、積極的にかかわろうとする意欲につながったのではないかと考える。



図4 どんぐり車を一緒に転がそう！

②11月16日

「クラス全体で伝え合おう」

4歳児と交流した後、クラスで、「今日見つけた友だちのいいところ」を紹介する場を設けた。すると、F男が出てきた。「どんぐり車のコースを作ってたんだけどね、トレイを貼りすぎて車が進まなくてすみれ組さん（4歳児）が困ってたんだ。だから、G君に“これ（トレイ）とってもいい？”って言ったら、“いいよ”って言ってくれたからうれしかった」と紹介する。教師が、「いいよ」と答えたG男の優しさや4歳児の思いを代弁して解決したF男の優しさを認めると2人とも照れくさそうにそしてうれしそうな表情になっていった。

③11月17日

「ここに貼ってもいい？」

次の日、F男とG男など6人で、朝から新しいコースを工夫して作っている。「ここにこれ

貼って、ジャンプ台にしよ」「トンネルも作ろう」と言いながら作っていく。いつもなら、G男がリーダーシップをとって自分の思いのままに作っていたが、この日は、「ここに、これ（トレイ）貼ってもいい？」とF男に聞いている。聞かれたF男は、うれしそうに「いいよ」と答えてさらに工夫しながら作っていった。

【考察】

②では、いつもは前に出て発表することの少ないF男が、自分から進んで伝える姿があった。F男にとっては、クラスみんなに自信をもって伝えたいような出来事だったと考えられる。また、G男にとっては、クラス全体の場で“自分がF男に対して、譲った優しさ”を認められたことで、相手の思いを受け入れて譲ることの大切さや認められる喜びを感じていった。そのため、いつもは自己中心的に遊びを進めるG男が、③では、自分から「ここに貼ってもいい？」とF男の意見も聞きながら、遊びを進めるようになっていった。

このことから、全体の伝え合う場で、互いの良いところを認め合うことを通して、相手の思いに気づいたり、認められる喜びを感じたりして、自己肯定感が高まり、相手の思いを受け入れようとする気もちが芽生えていくと考える。

また、同年齢のクラスの中では、あまり自分の思いを出さず控えめなF男が、4歳児の困った状況を解決しようと、同年齢のG男に積極的にかかわり4歳児の思いを代弁して伝えていった。そのような姿を教師が認め励ましたことが、F男の意欲を引き出すことにつながった。そのことで、異年齢の経験が同年齢での活動に活かされ、いろいろな場面でF男が自信をもって積極的に自分の思いを出せるようになった。

このように、5歳児では、適切な時にクラス全体で認め合う場や自信をもって語りたくなる場を設けることが、協同的な遊びの中で、同じ目的に向かって、相手の思いを受け入れ合い、伝え合う喜びを実感しながら遊びをすすめることにつながっていくと考えている。

④11月20日

「4歳児のトラブルをあきらめずに解決する」

人形劇コーナーの観客席で、4歳児が言い合いをして泣き始めた。すると、近くにいた4歳児が「席の取り合いでけんかしたるんよ」とH女(5歳児)に知らせに来る。それを聞き、H女は、「先生、どうしよう」という表情で、教師を見る。そこで、教師は、「いいよ。先生もそばにいるから、Hちゃん(5歳児)がすみれ組さん(4歳児)の話を聞いてあげて」と促した。

そこでH女は、けんかをしている二人に、「どうしたの?何があったか言ってごらん?」と聞いた。すると、「私が先にこの席取ってたのに、Iちゃんが後から来て取ったんよ」とJ女が言う。言われたI女は、涙が止まらず言葉がでない。「座りたかったんよね。分かるよ」と言いながら手を握るH女。「でも、無理やり取ったらいけんよね。貸してって言ったらよかったかもしれんね」とH女が言うと、I女が激しく泣き始めた。その様子から、教師は、もしかしたらI女はJ女が席を取っていたことを知らなかったのではないかと感じた。

そこで、教師は「Jちゃん、ずっと席にいたのかな?」と聞くと、J女は、「ちょっとだけ席を離れとったんよ。でも、私が先に取っとんたんよ」と言う。それを聞き、H女は、「そうか、席にいなかったらJちゃんが取ってたこと、気づかんかったんかな?」とI女に聞く。すると、「だって、分からなかったんじゃもん」とI女が泣きながら言う。「そうか、分からなかったけん、座ったんじゃね」とH女が言うと、I女は分かってもらえたという安堵感からか、涙がおさまってきた。

互いの思いを出し合うと4歳児は泣き止み、次からどうしたらよいかをH女と一緒に話し合っていた。その後、H女がもう一つ椅子をもってきて一緒に座り仲直りをしていった。



図5 手を握りながら4歳児の話を聞く5歳児

【考察】

H女は、これまで5歳児同士のトラブルでは、教師を頼りにし、自分で解決しようとする事はなかった。④の事例でも、まずH女は表情で教師に助けを求めている。しかし、教師は、すぐに間に入らず、そばで見守ることを約束し、H女自身が解決できるように援助していった。そのことで、H女は、自分なりの言葉で、4歳児の気持ちを代弁しながら、なんとか解決し、仲直りをさせることができた。

いつもであれば、あきらめていたH女が自分自身で解決できたのは、年下の4歳児に助けを求められて頼りにされていると感じとり、4歳児のために年上としてなんとかしてあげたいという気持ちが芽生えたからではないかと考える。

また、H女(5歳児)の4歳児への優しさや最後までやり遂げたことを認める教師の言葉かけにより、H女の自信となり、後日、同様のトラブルが5歳児同士で起こったときに、教師の助けを求めず、自分自身で解決する姿が見られた。

このように異年齢交流を通して、5歳児は、自分より年下の友だちに頼りにされたり、認められたりする体験から、自分が必要とされている存在であることを確認し、3・4歳児のことを考えて最後までやり遂げる心地よさを感じ、自信をつけていく。このような体験を積み重ねていく中で、5歳児同士の中でも、友だちが困っていたら一緒に解決しようとするなど、状況を感じとって自分なりにできることを考えて行動するようになっていくのである。

そのため、教師は、異年齢のかかわりの中で起こる困難な状況を、あきらめずに解決できるように見守ったり、思いを引き出すきっかけをつくりたりして援助し、子ども自身の力で乗り越える達成感を味わえるようにすることが大切である。そのことが自信となり、同年齢の中でも、もっとかかわってみよう、思いを伝えてみようとする意欲につながっていくと考えている。

6 実践を終えて

実践を積み重ねる中で、3・4歳児とのかかわりを通して、5歳児が伝え合う喜びを味わうための環境・援助のあり方について大切な点が次の通り明らかになった。

①異年齢交流で生じた問題を5歳児自身があきらめずに最後まで解決できるよう見守り、そのかかわりを認める教師の援助

実践例2の⑤で、教師は、様子を見守りながら状況に応じて4歳児の気持ちを引き出す声かけを行った。そのことで、H女は、4歳児のトラブルを自分自身の力であきらめずに解決していった。また、解決後、H女の4歳児へのかかわりを教師があたたかく受け止め、認めていった。そのことで、H女は認められる喜びを感じ、同年齢の中でも教師を頼らず、自分自身でトラブルなどを解決するなど、伝え合う喜びを味わう姿が見られるようになった。このことから、教師は、5歳児自身が起こった問題をあきらめずに解決できるよう様子を見守ったり、気持ちを引き出したりしながら援助していく必要がある。また、異年齢交流で身に着けた力を5歳児同士のかかりで発揮できるように、教師が5歳児なりのかかわり方をあたたかく認め、自信をもってさらにかかわってみよう、思いを伝えてみようという意欲を育むことが大切である。

②異年齢交流で生じた問題を見逃さずに取り上げ、同年齢のクラスで解決・実現のための方法を考える場を設けたり、友だちとのかかわりをつないだりする教師の援助

5歳児は、友だちと共通の目的をもって話し合いながら試行錯誤することができる時期である。「おばけ屋敷ごっこ」の実践例①では、4歳児の言葉をクラスで取り上げ話し合うことで、“より怖くするため”の工夫が膨らんでいった。

また、②では、教師は、遊びの様子を見守りながら、子ども自ら状況に気づいたり、自分なりにできることを考えたりしたことを、相手に伝えられるように5歳児同士のかかわりをつないでいった。そのことで、5歳児が起きた状況について友だちと考え合い、解決して行くことができた。

このように、教師は、異年齢交流で問題が生じた時を見逃さずに取り上げ、一人だけの問題に終わらせず、同年齢の友だちと一緒に考えられるように、5歳児同士のかかわりをつないだり、クラスで紹介する場を設けたりしていくことが大切である。その中で、困っている友だちのことを知ったり、自分もできることを考えたりしながら、子ども同士が伝え合う姿へとつながっていくと考えている。

③異年齢交流後に自信をもって語りたくなる場の設定と友だちのよさを認め合う集団づくり

実践例2の③では、異年齢交流後に同年齢の中での互いのよさを認め合ったり、楽しかったことを伝え合ったりする場を設けることで、F男は認められる喜びを感じていった。そして、認めてもらえたという嬉しさから、その後の5歳児同士の活動でも生き生きと思いを伝える姿が見られていった。友だちに思いを伝え、その思いが認められる経験が同年齢の中で思いを言葉で伝えることへの自信につながっていくことが分かった。

このことから、教師が伝え合う場を認め合う場にもしていくことで、話し手である子どもが自信をもち、自分の言葉で語るができるようになる。そのことで、クラスとしての伝え合い聞き合う雰囲気がつくれ、それによって個々の子どもの伝え合う力や聞く力も育っていくと考える。そのため、教師は異年齢交流後に自信をもって語りたくなる場を設け、友だちのよさを認め合う集団づくりをすることが大切である。

④異年齢交流と5歳児（同年齢）の協同的な活動を交互に織り交ぜながら活動を進める

「どんぐり村ランド」では、異年齢交流と5歳児同士の活動を交互に行うことによって、異年齢交流で育まれた力がすぐに5歳児の協同的な活動の場面でも活かされ、5歳児同士の伝え合いも活発になっていった。このことから、異年齢交流だけに偏るのではなく、異年齢交流と5歳児（同年齢）同士の活動を交互に織り交ぜながら活動をすすめる、異年齢交流で育ったかかわる力や伝え合う力を同年齢でも自信をもって発揮できるようにすることが大切である。

以上のように研究をすすめる中で、5歳児は、3・4歳児との異年齢交流を通して、思いを伝え合う経験をし、そこで身に付けた伝え合う力やかかわる力を5歳児同士のかかわりの中でも発揮していくことが分かった。そのことは、同年齢の中では控えめな5歳児が、年下の4歳児のトラブルをあきらめずに解決したことで自信となり、その後、5歳児で同様のトラブルが起きた時に、教師に頼らず友だちと伝え合いながら自分自身で解決していった姿などから見取ることができる。

また、この体験を積み重ねてきた5歳児の子どもたちは、自分以外の存在や思いがあることを知り、互いに助け合い認め合うことの大切さを学ぶとともに、やさしさや思いやりの心も育まれてきている。このように、多様なかかわりの中で伝え合う豊かな体験が、一人ひとりの自己の育ちを充実させるとともに他者の心の理解を深めていった。

これらのことから、人とのかかわりが希薄になっている現在だからこそ、異年齢の友だちとかかわることを通して、5歳児が伝え合う喜びを味わう体験ができる環境構成やそれを支える教師の援助の重要性を改めて実感することとなった。

今後も、伝え合いの豊かな体験を通して、多様な人と心がつながっていく喜びを実感できる保育を引き続き実践していきたい。

<引用・参考文献>

- 1) 中央教育審議会：「子どもを取り巻く環境の変化を踏まえた今後の幼児教育の在り方について（答申）」，2005.
- 2) 文部科学省：「幼稚園教育要領解説」p. 138, 2008, フレーベル館.
- 3) 前掲2) p. 15.
- 4) 神長美津子：「事例集—協同して遊ぶことに関する指導の在り方—」，p. 14, 2010. 3, 全国国公立大学附属学校連盟幼稚園部会.
- 5) 林若子：「異年齢の保育の実際と計画」，林若子・山本理絵編著，p. 25, 2010. 8, ひとなる書房.